小　学　校

平成２３年度

教育研究員研究報告書

音　　楽

東京都教育委員会

目　次

研究構想図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

Ⅰ　研究主題設定の理由　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

Ⅱ　研究の視点　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

Ⅲ　研究の仮説　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

Ⅳ　研究の方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2
　1　基礎研究
　2　調査研究
　3　実践研究

Ⅴ　研究の内容　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3
　1　調査研究の結果分析から見る指導上の課題

　2　表現したい思いや意図を音楽で表現できるようにするための
　　二つの学習過程
　(1)　思いや意図をもつ学習過程
　(2)　音楽を形づくっている要素の働かせ方を身に付ける学習過程

　3　実践事例　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　9
　　【A表現(1)歌唱イ　第3学年】
　　　題材名「曲の山を感じ取って表現しよう」
　　【A表現(2)器楽エ　第6学年】
　　　題材名「楽器の音が重なり合う響きを楽しもう」
　　【A表現(3)音楽づくりイ　第1学年】
　　　題材名「といとこたえのあそびうたをつくろう」
　　【A表現(3)音楽づくりイ　第5学年】
　　　題材名「まとまりのある音楽をつくろう」

　4「新学習指導要領に対応した授業の在り方」に関する調査結果　・・・　21

　5　音楽を形づくっている要素の働きとその働かせ方一覧表　・・・・・　22

Ⅵ　研究の成果と課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　24

研究構想図

共通研究テーマ「新学習指導要領に対応した授業の在り方について」

音楽科で求められていること

音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらが生み出す面白さや特質、雰囲気など感じ取ったことを基に、思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力の育成

指導上の課題（調査研究から）

・音楽を形づくっている要素の働きに対して、児童に自分なりの考えをもたせるための指導の工夫
・児童が自ら音楽表現に必要な技能に気付き、それらの技能を身に付けさせるための指導の工夫

研究の視点

児童に自分の思いや意図をもたせ、思いや意図を的確に表現する際に必要な音楽表現の技能を習得させるための一連の学習過程を、「思いや意図をもつ学習過程」と、「音楽を形づくっている要素の働かせ方を身に付ける学習過程」の二つと捉え、各過程における効果的な指導方法について、検証授業による実践研究を通して明らかにする。

研究主題

思いや意図と音楽表現をつなぐことのできる児童の育成
ー音楽を聴いて、音楽を形づくっている要素の働かせ方を身に付ける指導の工夫ー

研究の仮説

「思いや意図をもつ学習過程」と「音楽を形づくっている要素の働かせ方を身に付ける学習過程」での指導方法を工夫すれば、児童が自分の思いや意図をもち、思いや意図を的確に表現するために必要な音楽表現の技能を習得し、思いや意図を実際に音楽で表現できるようになるだろう。

研究の内容

基礎研究

次の内容についての基本的な考え方を整理した。
・思いや意図をもった音楽表現の捉え方について
・思いや意図を音楽表現につなげる学習過程の捉え方について
・音楽を聴くことの分析と捉え方について

調査研究

対象：都内公立小学校 310 校の音楽専科教員
方法：選択式によるアンケート用紙への回答
項目：①児童に音楽を形づくっている要素の働きを感じ取らせるための指導内容について
②児童に思いや意図をもって表現させるための指導内容について
③児童の表現の仕方を工夫させるための指導内容について

実践研究

○思いや意図をもつ学習過程

音楽を聴く
必要な部分を取り出して聴かせ要素に着目させる。

聴き取る
要素を聴き取らせる。

感じ取る
要素の働きによるよさを感じ取らせる。

思いや意図をもつ
感じ取ったことを手掛かりに思いや意図をもつ。

○音楽を形づくっている要素の働かせ方を身に付ける学習過程

見通しをもつ
要素の働きを意識させる。

試す
要素の働かせ方を試させる。

振り返る
基準や視点を与える。

技能の必要性を感じる
必要な技能に着目させる。

必要な技能に気付く

技能の習得

思いや意図をもった音楽表現

検証授業

・A表現(1)歌唱イ　第３学年〔共通事項〕旋律、強弱、フレーズ
・A表現(2)器楽エ　第６学年〔共通事項〕音色、音の重なり
・A表現(3)音楽づくりイ　第１学年〔共通事項〕リズム、問いと答え
・A表現(3)音楽づくりイ　第５学年〔共通事項〕速度、反復、変化

○「音楽を形づくっている要素の働きとその働かせ方一覧表」作成

研究の成果と課題

研究主題

思いや意図と音楽表現をつなぐことのできる児童の育成

ー音楽を聴いて、音楽を形づくっている要素の働かせ方を身に付ける指導の工夫ー

Ⅰ　研究主題設定の理由

音楽科では、音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらが生み出す面白さや特質、雰囲気など感じ取ったことを基に、思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力の育成が求められている。そして、思いや意図を音楽で表現できるようにするためには、児童に自分の思いや意図をもたせ、思いや意図を的確に表現する際に必要な音楽表現の技能を習得させることが必要である。児童に自分の思いや意図をもたせるためには、手掛かりとなる音楽を意図的に聴かせ、音楽を形づくっている要素に着目させることが重要であると考えた。また、表現に必要な技能を習得させるためには、教師が必要と考える技能の機械的な訓練を行うのではなく、児童が音楽を形づくっている要素の働かせ方を試行錯誤しながら工夫し、楽曲にふさわしい表現の方法を見いだすとともに、その表現に必要な技能に児童が自ら気付いて身に付いていくことが重要であると考えた。

そこで、研究主題を「思いや意図と音楽表現をつなぐことのできる児童の育成―音楽を聴いて、音楽を形づくっている要素の働かせ方を身に付ける指導の工夫―」と設定することとした。

Ⅱ　研究の視点

児童に自分の思いや意図をもたせ、思いや意図を的確に表現する際に必要な音楽表現の技能を習得させるための一連の学習過程を、「思いや意図をもつ学習過程」と、「音楽を形づくっている要素の働かせ方を身に付ける学習過程」の二つと捉え、各過程における効果的な指導方法について、検証授業による実践研究を通して明らかにする。

Ⅲ　研究の仮説

「思いや意図をもつ学習過程」と「音楽を形づくっている要素の働かせ方を身に付ける学習過程」での指導方法を工夫すれば、児童が自分の思いや意図をもち、思いや意図を的確に表現するために必要な音楽表現の技能を習得し、思いや意図を音楽で表現できるようになるだろう。

Ⅳ　研究の方法

1　基礎研究

「特定の課題に関する調査（音楽）調査結果報告書」（平成22年7月、文部科学省）、「言語活動の充実に関する指導事例集（小学校版）」（平成22年12月、文部科学省）、「評価方法等の工夫改善のための参考資料」（平成23年3月、国立教育政策研究所）、「平成22年度教育研究員研究報告書（小学校音楽）」（平成23年6月、東京都教育委員会）などを基に、次の内容について基本的な考え方を整理した。

・思いや意図をもった音楽表現の捉え方について
・思いや意図を音楽表現につなげる学習過程の捉え方について
・音楽を聴くことの分析と捉え方について

2　調査研究

以下の内容で調査を実施し、その結果分析を行った（P. 21 参照）。

(1)　対象　都内公立小学校 310 校の音楽専科教員

(2)　方法　選択式によるアンケート用紙への回答

(3)　時期　平成 23 年 9 月

(4)　項目

ア　児童に音楽を形づくっている要素の働きを感じ取らせるための指導内容について

イ　児童に思いや意図をもって表現させるための指導内容について

ウ　児童の表現の仕方を工夫させるための指導内容について

3　実践研究

(1)　思いや意図を音楽で表現できるようにするための学習過程を「思いや意図をもつ学習過程」と「音楽を形づくっている要素の働かせ方を身に付ける学習過程」の二つと捉え、各学習過程における具体的な手だての有用性について検証した。

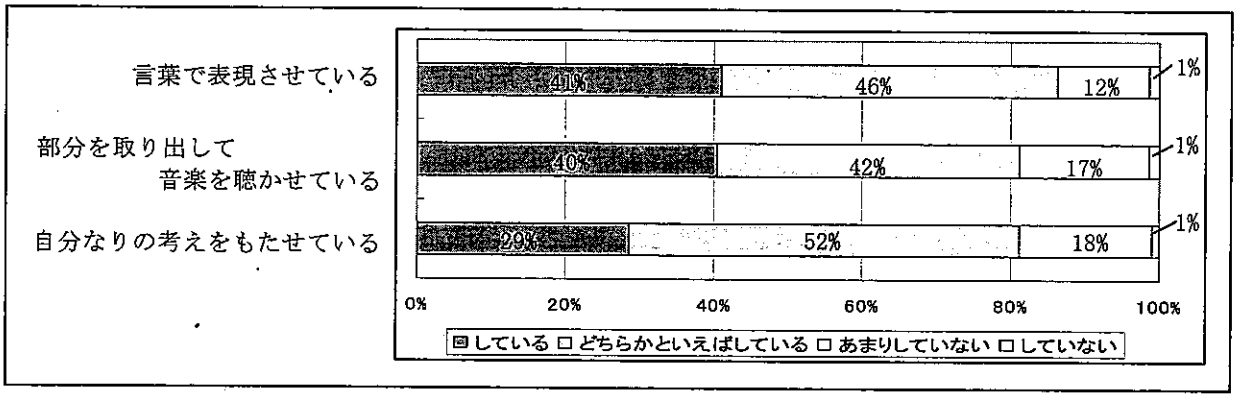
(2)　「要素の働きとその働かせ方に関する一覧表」を作成した。

Ⅴ　研究の内容

1　調査研究の結果分析から見る指導上の課題

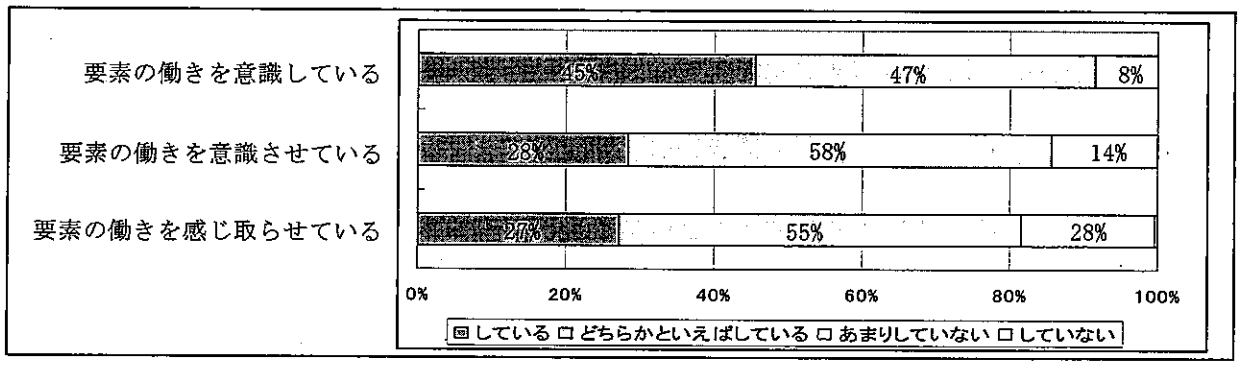
表現や鑑賞の活動においては、取り扱う楽曲の曲想を感じ取り表現したり鑑賞したりすることが大切である。この曲想を生み出しているのは、要素の関わりによってつくられる「楽曲の構造」であり、取り扱う楽曲から要素を聴き取らせ、要素の働きによるよさや面白さ、美しさを感じ取らせるようにすることが重要である。

調査研究の結果から、児童に音楽を形づくっている要素（以下「要素」という。）の働きを感じ取らせるために、「部分を取り出して音楽を聴かせている」と回答した割合（40%）や「言葉で表現させている」と回答した割合（41%）に比べると、「自分なりの考えをもたせている」と回答した割合（29%）が少ないことが分かった（**グラフ１**）。部分を取り出して音楽を聴かせたり言葉で表現させたりしながら指導を行っているにもかかわらず、自分なりの考えをもたせているとまで教師が意識して指導している割合が少ないのではないかと捉えた。児童に表現したい思いや意図をもたせるためには、部分を取り出して音楽を聴かせたり言葉で表現させたりする指導を効果的に活用しながら、要素の働きに対して自分なりの考えをもたせる指導の工夫が必要である。



グラフ１　児童に音楽を形づくっている要素の働きを感じ取らせるための指導内容

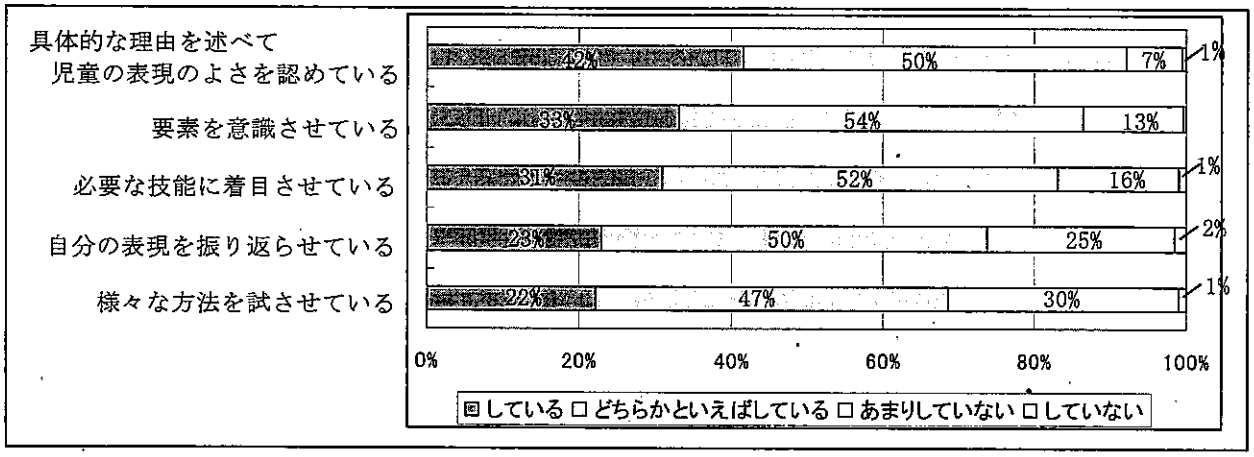
また、児童に思いや意図をもって表現させるために、教師自身が「要素の働きを意識している」と回答した割合（45%）に比べると、児童に「要素の働きを意識させている」と回答した割合（28%）や「要素の働きを感じ取らせている」と回答した割合（27%）が少ないことが分かった（**グラフ２**）。児童に思いや意図をもって表現させるためには、教師自身が要素の働きを意識するだけではなく、児童に要素の働きを意識させたり、要素の働きを感じ取らせたりするための指導の工夫が必要である。



グラフ２　児童に思いや意図をもって表現させるための指導内容

また、児童に表現の仕方を工夫させるために、「具体的な理由を述べて児童の表現のよさを認めている」と回答した割合（42%）に比べると、「様々な方法を試させている」と回答した割合（22%）や、「自分の表現を振り返らせている」と回答した割合（23%）が少ないことが分かった（**グラフ３**）。児童が自ら考え、試行錯誤し、主体的に活動に取り組めるようになるためには、教師が児童の表現のよさを認めること、児童に様々な方法を試させたり、思いどおりの表現ができているかどうか自分の表現を振り返らせたりすることが大切であり、そのための指導の工夫が必要である。

そして、児童に思いや意図をもって表現させるために「要素を意識させている」と回答した割合（28%）と同様、表現の仕方を工夫させるために「要素の働きを意識させている」と回答した割合（33%）が少ないことが分かった（**グラフ２及びグラフ３**）。児童が、要素やそれらの働きを手掛かりにしながら表現を工夫できるようにすることが重要である。そのためには、思いや意図をもって表現させたり表現の仕方を工夫させたりする活動においても、要素や要素の働きを常に意識させるための指導の工夫が必要である。



グラフ３　児童に表現の仕方を工夫させるための指導内容

さらに、「必要な技能に着目させている」と回答した割合（32%）が少なかったが、表現に必要な技能に児童が自ら気付いて身に付けていくための指導の工夫が必要である。

2　表現したい思いや意図を音楽で表現できるようにするための二つの学習過程

基礎研究から、表現したい思いや意図を音楽で表現できるようにするためには、児童に自分の思いや意図をもたせ、思いや意図を的確に表現するために必要な音楽表現の技能を習得させることが必要であると考えた。特に、音楽表現の技能の習得では、教師が技能の必要性や技能そのものを教え込むのではなく、思いや意図を表現するために必要な技能に児童が自ら気付いて身に付けていくことができるようにすることが重要である。そのためには、思いや意図をもてるようにする学習過程と、児童に技能の必要性を感じ取らせ、必要な技能とはどのようなものなのかに気付かせ習得させる学習過程とに分類して、それぞれの学習過程における指導を工夫していくことが効果的である（図１）。

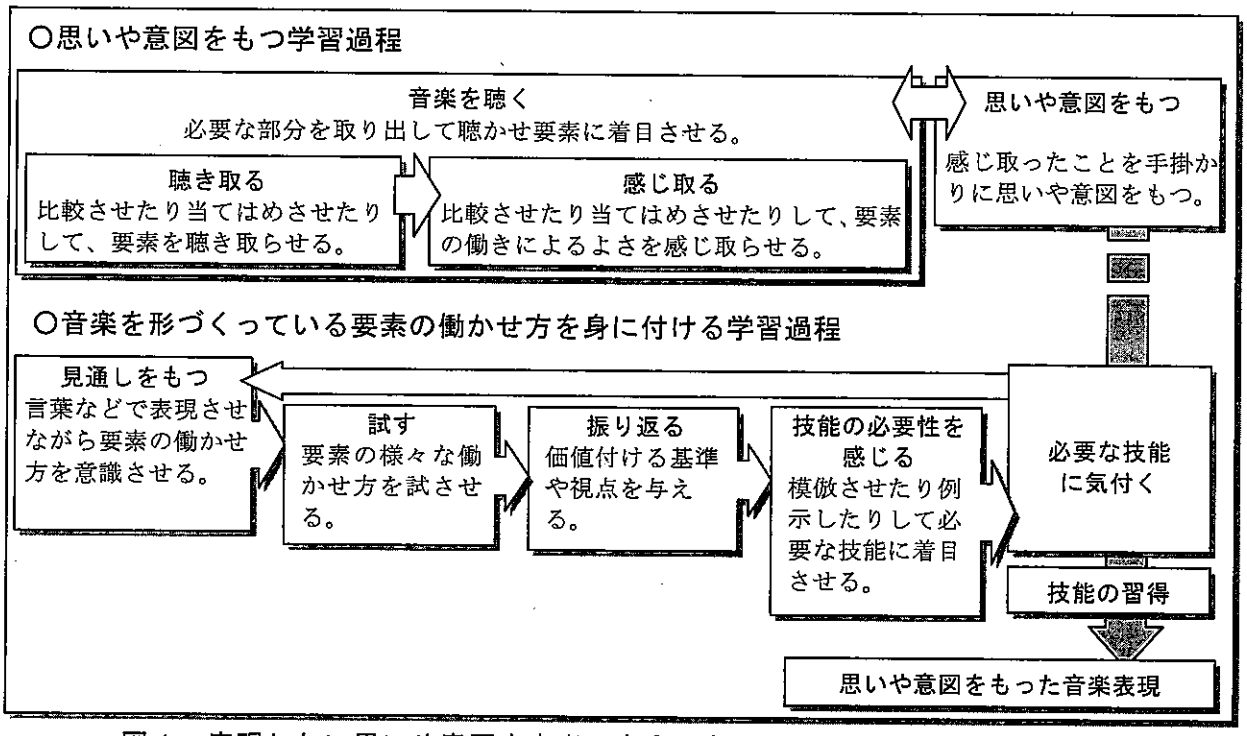


図１　表現したい思いや意図を音楽で表現できるようにするための学習過程

(1)　思いや意図をもつ学習過程

児童に自分の思いや意図をもたせるためには、手掛かりとなる音楽を意図的に聴かせ、音楽を形づくっている要素に着目させることが重要である。そこで、要素を「聴き取る」段階と要素の働きを「感じ取る」段階を、必要な部分を取り出して聴かせ要素に着目させるための「音楽を聴く」段階と捉える。そして、聴き取った要素と感じ取った要素の働きによるよさや面白さを手掛かりにして、思いや意図をもつまでの学習過程を「思いや意図をもつ学習過程」と捉え、各段階における指導方法を工夫していくことが有効である。

「**聴き取る**」段階では、この段階では、児童が複数の対象を聴き比べながら比較して聴き取ったり、既習内容と照らし合わせながら当てはめて聴き取ったりすることが重要である。

具体的な手だて	児童の変容
旋律と強弱の関わり合いを聴き取らせるために、指揮者が違う演奏を聴き比べさせる。	・同じ曲でも指揮者によって速さの変化のさせ方が違うことに気付いた。 ・一方の特徴にはっきりと気付くことができた。
音色や音の重なりを聴き取らせるために、声部の役割が異なる演奏を聴き比べさせる。	・各声部を一つずつ聴いたり組合せて聴いたりしたことで、声部の役割や音色に着目することができた。
旋律や強弱の変化を聴き取らせるために、歌唱教材での経験に当てはめさせて、体を動かしながら演奏を聴かせる。	・旋律や強弱に着目して聴き、旋律の高さや強弱の強さに合わせて、体を動かすことができた。 ・旋律と強弱の関わりに着目することで旋律が高くなると強弱が強くなるという関わりを聴き取ることができた。
模倣や対照を聴き取らせるために、リズムに着目させながら問いと答えを聴かせる。	・リズムに着目して聴き、リズムを手拍子で打ったりリズム譜でリズムを確認したりして、模倣や対照を聴き取ることができた。

「感じ取る」段階では、比較させたり当てはめさせたりして、要素の働きや関わり合いによる雰囲気や特質、よさや面白さを感じ取らせることが重要である。また、感じ取った要素の働きのよさや面白さを言葉などで表現させることにより、そのよさや面白さを確認したり共有したりすることができる。さらに、音楽に関する用語や記号を使った言葉で表現させることで、感じ取ったことが共有しやすくなる。

具体的な手だて	児童の変容
速度の変化による曲想の移り変わりを感じ取らせるために、曲の中で、速度が変化している部分だけを取り出して繰り返し聴かせ、言葉で共有させる。	・「アからイに移るときに速度がゆっくりになり拍の流れの伸び縮みがあるので明から暗に変わった感じがした」ことを感じ取った。 ・言葉で表現できなかった児童も友達の発言により速度の変化とそれが生み出す働きのよさについて確認するようになった。
声部にふさわしい音色や音の重なり方で各声部が関わり合えば全体の響きが豊かになることを感じ取らせるために、音の重なりが異なる演奏を比較して聴かせる。	・音の重なりが異なる演奏を、気に入った音色に着目して聴いたり重なった響きを比較して聴いたりすることで、声部にふさわしい音色や音の重ね方で演奏されていると、美しい演奏になることを感じ取った。
強弱の変化による曲想の変化を感じ取らせるために、強弱のない単調なピアノ演奏と強弱による曲の山が明確なヴァイオリン演奏を比較して、強弱の変化に合わせて体を動かしながら聴かせる。	・「ピアノの演奏では体を動かせない」、「強弱の変化があるヴァイオリンの演奏の方が迫力があってきれいに聴こえる」、「曲の山があると心に響いてくる」、「始めを弱く弾いているから山がもっと盛り上がって伝わってくる」ということを感じ取ることができた。
問いと答えによるやり取りや繰り返しの面白さや楽しさを感じ取らせるために、模倣や対照になるようにリズムをつくって歌わせる。	・つくったリズムが模倣や対照になることで、やり取りをしたり繰り返したりする面白さや楽しさを感じ取ることができた。

これらの学習過程を経て、聴き取った要素や感じ取った要素の働きのよさや面白さを手掛かりにすることで、児童は自分の思いや意図をもつことができるようになる。

(2)　要素の働かせ方を身に付ける学習過程

感じ取った要素の働きのよさや面白さを手掛かりにしてもった思いや意図を、音楽で表現するためには、音楽を形づくっている要素の働かせ方を身に付けることが必要である。そのためには、「見通しをもつ」「試す」「振り返る」「技能の必要性を感じさせる」「必要な技能に気付く」の各段階を経て、必要な技能を習得する過程を「要素の働かせ方を身に付ける学習過程」と捉え、各段階における指導方法を工夫していくことが有効である。

「見通しをもつ」段階では、言葉などで表現させながら要素の働きを意識させるように

する。この段階では、児童が思いや意図を音楽で表現するために、要素の具体的な働かせ方に気付くことが重要である。要素をどのように働かせていけばよいのかという見通しをもつことで、その働かせ方を試したり、思いや意図が音楽で表現できているかを振り返ったりすることができる。

具体的な手だて	児童の変容
自分で感じ取ったことを基に話し合いグループで共有させる。	・最後の部分を激しくしたいので、途中までだんだん遅く演奏をし、間をつくって最後の部分は速く演奏をして激しい感じを出したい、ということを確認し、ワークシートに記入した。
各声部の役割を生かすために音色に着目させてグループで相談させる。	・低音は全体の響きを支えるために「低音の声部はバス木きんのような音色がいい」という思いをもった。
旋律の高さの変化を曲線で表し、板書で視覚化する。	・板書を基にしながら、旋律の高さが上がるにつれて強弱を強くすることで曲の山を伝えたいという思いをもった。
旋律の高さの変化を手の高さで表現するなど体を動かす活動を取り入れる。	・曲の山だけ強いのではなく、始めは弱くだんだん強くしていき、曲の山が一番強くはっきり伝わるように表現したいという思いをもった。
模倣や対照を意識させるために、つくった遊びうたを歌ったり手拍子で打ったりさせる。	・つくった遊びうたを歌ったり手拍子で打ったりすることで、模倣や対照を意識し、模倣や対照になるようなリズムを考えて、学習シートに記入した。

「**試す**」段階では、要素の様々な働かせ方を試させるようにする。この段階では、要素をどのように働かせていけばよいのかという見通しを基にしながら、児童が自ら考え、試行錯誤を重ねていくことが重要である。要素の様々な働かせ方を試行錯誤することで、要素の働かせ方を身に付けていくことができる。

具体的な手だて	児童の変容
選んだ音色で、各声部の役割を生かした演奏になるか試す。	・いろいろな楽器や音色で演奏して、組合せを考えることで、声部の役割を生かした演奏についてより考えるようになった。
一番大切な曲の山を伝えるために、「山のところだけを強く」「最初から強く」「最初を弱く」「はじめからだんだん強く」「だんだん弱く」など意見を基に強弱の働かせ方を試す。	・自分たちの声の強弱を聴きながら歌う意識をもつようになった。 ・強弱の様々な働かせ方を試すことで、「強弱を強くしていくと迫力や盛り上がる感じを出せる」など、強弱の働きを明確に感じ取り、言葉で表現しようとするようになった。
模倣や対照を生かした遊びうたをつくれるように、言葉のもつリズムを大切にしながら、リズムのつくり方を試す。	・言葉のもつリズムを大切にしながら、問いと答えのリズムのつくり方を試すことで、模倣や対照を生かしたリズムのつくり方についてより考えるようになった。

「**振り返る**」段階では、要素を働かせることによって、思いや意図が的確に表現できているかを振り返らせるようにする。この段階では、児童が思いや意図を的確に表現できる要素の働かせ方に気付くようにするために、教師が価値付けたり基準や視点を与えたりすることが重要である。振り返ることにより、自分の思いや意図を的確に表現できているかどうかを判断することができる。

具体的な手だて	児童の変容
グループの演奏を聴き合い、各声部の役割を生かすことのできる演奏になっているか振り返る。	・各声部の役割を生かした演奏になっているか振り返り、役割を生かした音色ではないことに気付いた。
速さを変化させたことで激しい感じが出たかどうか振り返る。	・思いどおりに速さを変化させられなかったので、激しい感じが出ていないことに気付いた。

自分たちの歌を録音し、「始めは弱く→山に向かってだんだん強く、山が一番伝わるように」という強弱の働かせ方の基準を明確にして、思いどおりに強弱を働かせることができているか振り返る。	・あまり強弱が変わっていないのは、最初が強すぎたり、音が高い所の声があまり出ていなかったりしているからということに気付いた。

「**技能の必要性を感じる**」段階では、模倣させたり例示したりして要素を働かせるために必要な技能に着目させるようにする。この段階では、思いや意図を実現するための技能を教師が明確にもち、児童にその必要性を感じさせるための手だてをとることが重要である。児童が技能の必要性を感じることで、技能は思いや意図を実現するための手段となる。

具体的な手だて	児童の変容
友達と聴き合い、速さを変化させることで激しい感じが出たかどうか技能に着目させ、聴き比べる。	・速さを変化させるには拍を合わせることが必要ということに着目した。
役割に合った音色、音域、演奏方法に着目させ、他のグループの演奏や範奏を聴き比べる。	・「主な旋律を生かすように、柔らかいマレットで細かい音を出していた」など、演奏の違いの理由に気付き、マレット選びなど音色を選ぶ重要性や、演奏方法の工夫が必要ということに着目した。
曲の山を表現するために十分な強さで歌えているかに着目させ、互いの声を聴き合う。	・思ったほど強くなっておらず、音が高い所の声の出し方の工夫が必要ということに着目した。
一定の拍で音楽をつくることに着目させ、一定の拍による音楽とそうではない音楽を聴き比べたり、歌って比べたりする。	・一定の拍に乗った音楽とそうではない音楽を比較聴取することで、一定の拍で音楽をつくることの必要性に着目した。
言葉のもつリズムに着目させ、言葉のもつリズムを手掛かりにしたリズムとそうではないリズムを聴き比べる。	・言葉のもつリズムを大切にしたリズムとそうではないリズムを聴き比べることで、言葉のもつリズムを手掛かりにリズムをつくる必要性に着目した。

「**必要な技能に気付く**」段階では、児童自らが思いや意図を実現するための具体的な方法としての技能を見いだすことができるようにする。この段階では、教師が技能そのものを教え込んだり、機械的な訓練を行ったりするのではなく、その表現に必要な技能を児童自らが見いだすための手だてをとることが重要である。児童自らが必要な技能に気付くことで、思いや意図を実現するための手段としての技能を身に付けていくことができる。

具体的な手だて	児童の変容
一つの声部の音色を変えた演奏を提示し、役割を生かした音色に気付かせる。	・音色を変えることで、声部の役割を生かせることに気付いた。
響きのある声とない声を例示し、響きのある声の出し方ができると、曲の山に適した表現ができることに気付かせる。	・副鼻腔のあたりを十分に広げて、声を響かせる意識をもって声の当て方を工夫すると、響きのある声を出すことができることに気付いた。
一定の拍に乗りながら単語でリレーをして、一定の拍で音楽をつくれることに気付かせる。	・一定の拍で音楽をつくることで、問いと答えの音楽がお話しているように楽しいやり取りができることに気付いた。
言葉のもつリズムを手掛かりにしたリズムとそうでないリズムを聴き比べて、言葉のもつリズムを手掛かりにリズムをつくると、相手に伝わりやすいことに気付かせる。	・言葉のもつリズムを手掛かりにリズムをつくることで、自分の考えた言葉が相手に伝わるような遊びうたをつくることができることに気付いた。

3　実践事例

【Ａ表現(1)歌唱イ　第３学年】

1　題材名　　「曲の山を感じ取って表現しよう」（４時間扱い）

2　題材の目標　　曲の山を生かして、歌詞の内容や曲想にふさわしい表現の仕方を工夫して歌う。　　〔共通事項〕 旋律、強弱、フレーズ

教材名　「メヌエット」（ベートーベン作曲）

「一人の手」（本田路津子訳詞／ビートシーガー作曲／飯沼信義編曲）

3　題材の評価規準

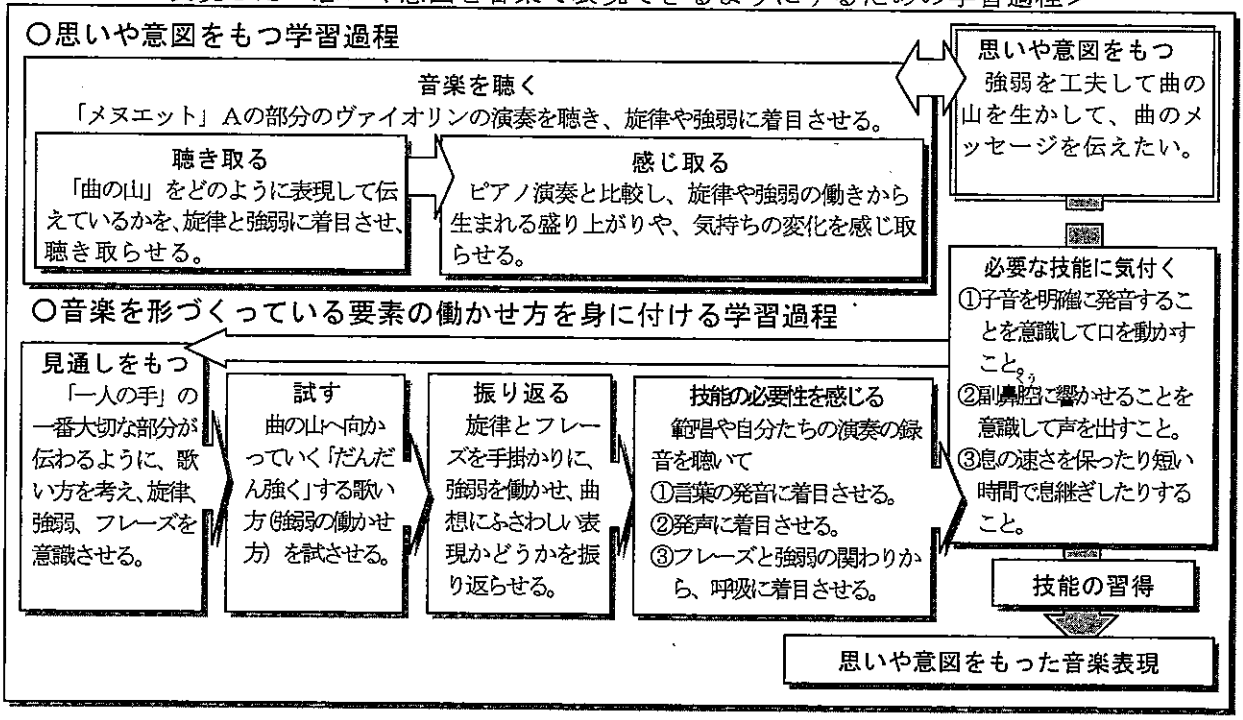
音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
旋律の動きに興味・関心をもち、旋律と歌詞の内容を生かして曲想にふさわしい表現を工夫する学習にすすんで取り組もうとしている。	旋律の動きを聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さなどを感じ取りながら、歌詞の内容と曲想にふさわしい表現を工夫し、どのように歌うかについて自分の考えや願い、意図をもっている。	旋律や歌詞、曲想にふさわしい表現で歌ったり、自分の歌声や発音に気を付けたりして、基礎的な技能を身に付けて歌っている。

4　題材観

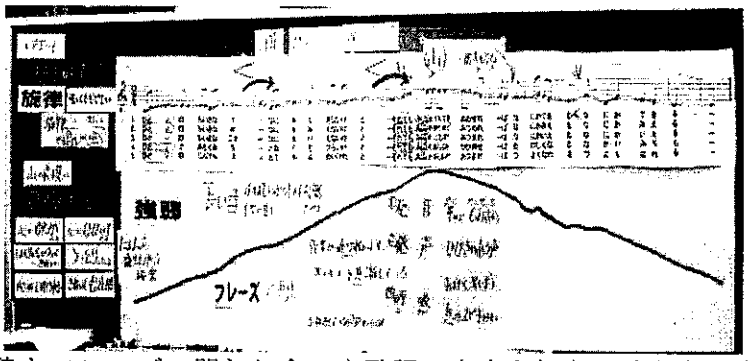
本題材は、学習指導要領第３学年の内容Ａ表現(1)歌唱イ「歌詞の内容、曲想にふさわしい表現を工夫し、思いや意図をもって歌うこと」を実現するための題材である。「一番伝えるべき大切な部分」を「曲の山」と捉え、旋律と強弱との関わり合いや旋律とフレーズとの関わり合いに着目させて曲想を感じ取り、表現に対する明確な考えや願い、意図がもてるようにする。また、強弱は、旋律との関わり合いの中で相対的に働く要素であり、「力強い」「優しい」などの音の質感を「強さ」や「弱さ」で表していると捉え、強弱の働かせ方を身に付けるようにする。

＜本題材における音楽表現に必要な技能＞
①子音を明確に発音することを意識して口を動かすこと。
②副鼻腔に響かせることを意識して声を出すこと。
③息の速さを保ったり短い時間で息継ぎをしたりすること。

＜表現したい思いや意図を音楽で表現できるようにするための学習過程＞



時	学習過程		○学習内容　・学習活動　◆具体の評価規準（評価方法）
1	音楽を聴く	聴き取る	○「一人の手」の範唱を聴き、旋律や強弱、歌詞の内容に着目する。 ・曲の背景を知り、歌詞の内容を理解する。 ・旋律や強弱、歌詞の内容に注目しながら範唱を聴く。 ○旋律や強弱の変化や、歌詞の内容を聴き取る。 ・旋律の高さに合わせて手を動かして歌い、旋律が一番高いフレーズで起立する。 ・１番～５番の歌詞で共通の言葉を確認し、一番大切なフレーズを考える。 ・もう一度範唱を聴き、強弱の変化を聴き取る。
		感じ取る	○旋律と強弱との関わり合いや歌詞から、曲の中で一番盛り上がって大切な部分、伝えたい部分（＝曲の山）を感じ取る。 ・旋律や強弱の変化、歌詞を手掛かりに、「曲の山」を確認する。 ・一番大切な部分を聴いている人に伝えるにはどうしたらいいのかを考える。
	音楽を聴く	聴き取る	○一番大切な部分を上手に表現している例として、「メヌエット」Aの部分のヴァイオリン演奏を聴き、旋律や強弱に着目する。 ・旋律や強弱に着目して、曲の山がどこかを考えながら聴く。
			○一番大切な部分をどのように表現して伝えているかを、旋律と強弱を手掛かりに聴き取る。 ・旋律の高さに合わせて手を動かし、一番の盛り上がっているところで立つ。 ・強弱と合わせて聴き、一番大切な部分で立つ。
		感じ取る	○ピアノ演奏と比較して、旋律や強弱の働きから生まれる盛り上がりや、気持ちの変化を感じ取る。 ・強弱や盛り上がりの表現を抑えたピアノ演奏を聴いてヴァイオリン演奏と比較する。 ・ヴァイオリンの演奏を聴き、曲の山から感じ取れる気持ちの変化についてワークシートに記入する。
	思いや意図をもつ		・「メヌエット」で感じ取ったことを手掛かりに、「一人の手」で曲の山を伝えるために工夫することをワークシートに記入する。 ◆ア①曲の山や歌詞の内容が生み出す曲想とその変化を感じ取って聴く学習に進んで取り組もうとしている（行動観察・発言内容・ワークシートの記述）。 ♫　児童のワークシートから　♫ ♪一番大切なところを強くひくと心にひびく。 ♪心にグサッとくる。山がないとこない。 ♪高くてつよいけどきれい。うっとりする。 ♪音をのばしていてとてもきれいでもり上がりがある。 ♪山の前はだんだん強くする。 ♪山が一番強くなるように歌いたい。 ♪山のところは明るく言葉が伝わるようにはっきり歌う。 ♪高いところをきれいに歌いたい。
2	思いや意図をもつ		○「強弱を工夫して曲の山を生かして、曲のメッセージを伝えたい。」という思いをもつ。 ・前時のワークシートを基に、一番大切な部分を伝えるための工夫について話し合い確認する。
	見通しをもつ		○一番大切な部分が伝わるように、歌い方の工夫を考え、旋律、強弱を意識する。 ・旋律を手掛かりに強弱をどのように働かせるか、強弱の働かせ方を曲線にして、模造紙に書き込む。 ◆ア②旋律の動きに気を付けて歌ったり、聴いたりして、進んで曲の山を捉えようとしている（発言内容・行動観察・演奏聴取）。
	試す		○曲の山のところの「強い」表現の仕方（強弱の働かせ方）を試す。 ・意見の中から、曲の山が伝わるかどうか、いくつかの方法を試す。
	振り返る		○旋律を手掛かりに強弱を働かせ、曲想にふさわしい表現かどうかを振り返る。 ・録音を聴き、曲想にふさわしい「強さ」が表現できているかを振り返る。 ◆イ①旋律と強弱の関わり合いを感じ取り、歌詞の内容と曲想にふさわしい表現を工夫し、どのように歌うかについて自分の考えや願い、意図をもっている（発言内容・行動観察・演奏聴取）。
	技能の必要性を感じる		○一番大切な部分が伝わる方法を考え、発音や発声の必要性に着目させる。 ・振り返ったことを基に、表現の工夫の仕方を考える。 ・発音の仕方の工夫が必要なことに着目する。 ・発声の仕方の工夫が必要なことに着目する。

	必要な技能に気付く・技能の習得	○必要な技能（①子音を明確に発音することを意識して口を動かすこと。②副鼻腔に響かせることを意識して声を出すこと。）を知る。 ○子音を明確に発音することを意識して口を動かす技能を身に付ける。 ・ゆっくりはっきり発音して歌い、少しずつ曲に合った速さに戻す。 ○副鼻腔に響かせることを意識して声を出す技能を身に付ける。 ・自分の声を確かめながら、二人組でお互いを聴き合いながら歌う ・山の歌い方に気を付けて全員でもう一度歌い録音して、聴く。
3	思いや意図をもつ	○「強弱を工夫して曲の山を生かして、曲のメッセージを伝えたい。」という思いをもつ。 ・前時に話し合った「一番大切な山の部分を伝えるため」に必要な技能（①発音の仕方 ②発声の仕方）に気を付けて表現することを確認し、歌う。
	見通しをもつ	○一番大切な部分が伝わるように歌い方を考え、旋律、強弱、フレーズを意識する。 ・強弱と旋律の高さに合わせて体を動かしながら歌い、「第２フレーズの方が音が上がっているのでより強く歌う。」という見通しをもつ。
	試す	○曲の山へと向かっていく「だんだん強く」する歌い方（強弱の働かせ方）を試す。 ・「だんだん強く」を意識して歌い、強弱の働かせ方を話し合う。 ・「だんだん強く」が山へ向かっていく感じを表現するために一番ふさわしい強弱の働かせ方かどうか、意見として出た強弱の働かせ方を試す。
	振り返る	○旋律とフレーズを手掛かりに、強弱を働かせ、曲想にふさわしい表現かどうかを振り返る。 ・メヌエットの強弱表現を自分たちの演奏と比較して「長い音の演奏の強弱や演奏の仕方」と「フレーズとフレーズの間」の２点に着目して聴く。 ・次のフレーズへの盛り上がりを表現するために、伸ばしながら強弱を強くする必要性に着目する。
	技能の必要性を感じる	○範唱や自分たちの演奏の録音を聴いて、フレーズと強弱の関わりから、呼吸の仕方に着目する。 ・特にフレーズ最後の長い音の強弱について自分たちの歌はどうかを話し合い、呼吸の仕方の工夫が必要なことに着目する。
	必要な技能に気付く・技能の習得	○必要な技能（③息の速さを保ったり短い時間で息継ぎをしたりする技能）を知る。 ○必要な技能（③息の速さを保ったり短い時間で息継ぎをしたりする技能）を身に付ける。 ・息だけで歌ってみたり息の吸い方や吐き方を確認したりする。
	思いや意図をもった表現	○強弱の働かせ方や、習得した技能に気を付けて、全員で歌い録音して振り返る。 ・強弱を働かせて「曲の中で一番伝えるべき大切な部分＝曲の山が伝わっているか」に着目して録音を聴く。  ◆ウ①旋律とフレーズの関わり合いや歌詞の内容を捉えて強弱を工夫し、曲の山を意識した表現で歌っている（発言内容・行動観察・演奏聴取）。

児童の変容

・曲の一部を取り出し、「要素の変化に合わせて体を動かしながら聴く」ことにより、旋律や強弱、フレーズなどの要素に着目することができた。また、ヴァイオリンの「長い音のクレッシェンド」に注意して聴くなど聴く視点を絞ることで、音を伸ばしながら強弱を意識して次のフレーズにつなげていくと、全体の盛り上がり感が豊かになり、山が伝わることを感じ取ることができた。
・言葉を伝えるためには発音、高い音をきれいに歌うためには発声、音を長く伸ばしたり強弱を工夫したりするためには呼吸など、「思ったり意図したりした表現に近付くために、技能の習得が必要」であるという意識をもつことができた。

【Ａ表現(2)器楽エ　第６学年】

1　題材名　「楽器の音が重なり合う響きを楽しもう」（５時間扱い）

2　題材の目標　　各声部の役割を理解し、音色や音の重ね方を工夫して演奏する。

〔共通事項〕　音色、音の重なり

教材名「ラバースコンチェルト」（デニーランデル・サンデーリンザ作曲／石桁冬樹編曲）

3　題材の評価規準

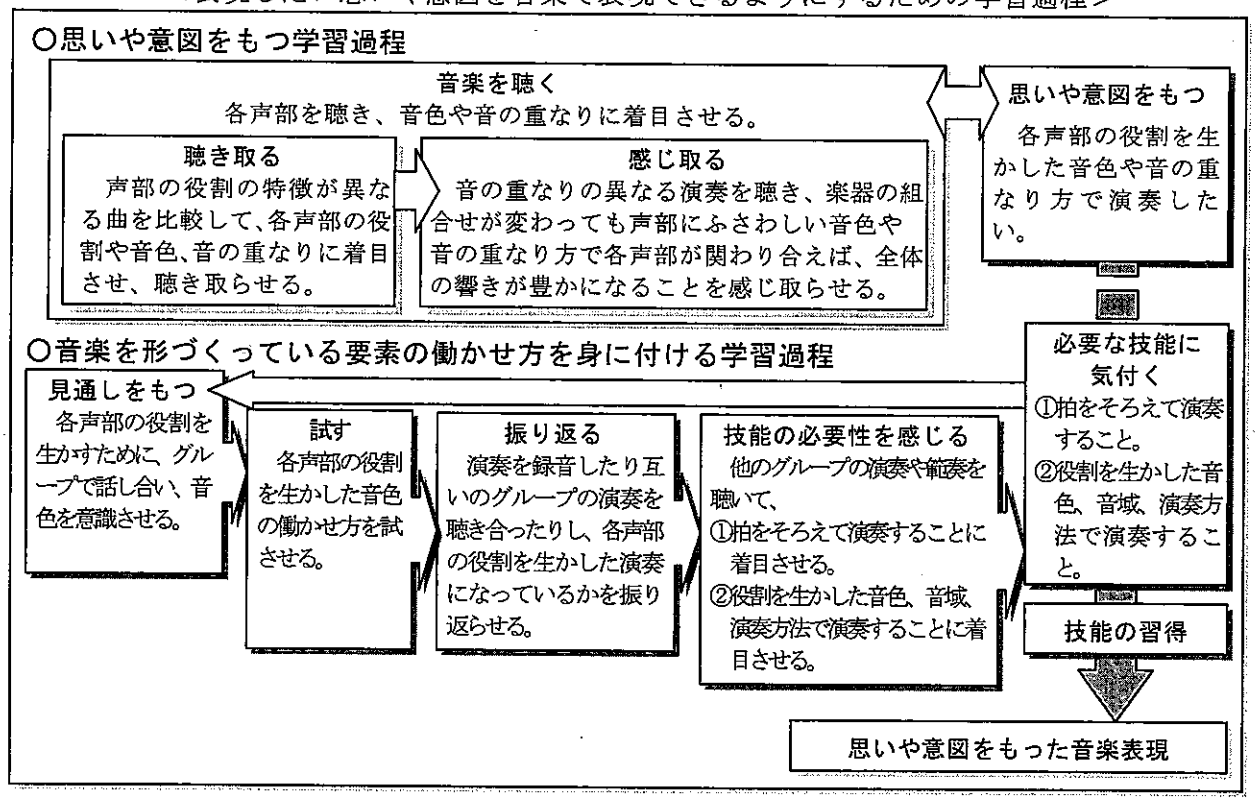
音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
楽器の音色や音の重なりを聴きながら演奏する学習に主体的に取り組もうとしている。	楽器の音色や音の重なりを聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さなどを感じ取りながら、どのように演奏するかについて思いや意図をもっている。	楽器の音色や音の重なりを聴きながら、自分の音を友達の音と調和させて合奏をしている。

4　題材観

本題材は、学習指導要領第６学年の内容Ａ表現(2)器楽エ「各声部の楽器の音や全体の響き、伴奏を聴いて、音を合わせて演奏すること」を実現するための題材である。各声部の役割を理解することで音色や音の重なりを意識し、どのような合奏にするか明確な考えや願いをもてるようにする。「声部の役割」とは、それぞれの声部がどのような役割をもっているかということである。各声部にふさわしい「音色」や「音の重なり」の働かせ方を身に付けて、自分の演奏を全体の中で調和させて演奏することができるようにする。

＜本題材における音楽表現に必要な技能＞
①拍をそろえて演奏すること。
②役割を生かした音色、音域、演奏方法で演奏すること。

＜表現したい思いや意図を音楽で表現できるようにするための学習過程＞



5　題材の指導計画と評価計画（５時間扱い）

時	学習過程		○学習内容　・学習活動　◆具体の評価規準（評価方法）
1	音楽を聴く	聴き取る	○声部の役割の特徴が異なる曲を比較して、各声部の役割や音色、音の重なりに着目させ、聴き取る。 ・各声部を聴き、旋律の特徴を考える。 ・主な旋律と他の旋律を順に組み合せて聴き、声部の役割と音色に着目する。 ・各声部の役割が異なる演奏を聴き、各声部の役割を生かすためには音色や音の重なりが大切なことを聴き取る。
		感じ取る	○音の重なりが異なる演奏を聴き、楽器の組合せが変わっても声部にふさわしい音色や音の重なりで各声部が関わり合えば、全体の響きが豊かになることを感じ取る。 ・楽器の組合せが違う演奏を、好きな音色や声部に着目して美しさを味わう。 ・重なった響きの美しさを味わう。
	思いや意図をもつ		○「各声部の役割を生かして演奏したい。」という思いをもつ。 ・各声部の役割を意識しながら、各声部のリズムを手拍子・足拍子などでたたく。 ・各声部に分かれて、各声部の役割を生かすように合わせる。 ・声部の役割を生かそうとした演奏になっているか、聴き合う。 ◆ア①各声部の役割や楽器の音色、全体の響きに興味・関心をもつ。 （発言内容・行動観察）
2	思いや意図をもつ		○「各声部の役割を生かして演奏したい。」という思いをもつ。 ・声部の役割にふさわしい音色や音の重なりの演奏を聴き、音色や音の重なりが大切であったことを確認する。 ・声部にふさわしい音色や音の重なりで各声部が関わり合っている演奏を聴く。
	見通しをもつ		○各声部の役割を生かすために、グループで話し合い、音色を意識させる。 ・グループに分かれ、各声部の役割を生かすためにどのような音色の組合せにしたらよいかを話し合う。 ・ワークシートに、選んだ楽器と、自分の演奏をどのようにしたら役割が生かせるのか、考えを記入する。
	試す		 ○選んだ楽器や音色で、各声部の役割を生かした音色の働かせ方を試す。 ・同じ声部同士で、音程やリズムを確かめ合う。 ・グループで楽器や音色のいろいろな組合せを試す。 ◆ア②自分の音と友達の音を合わせて演奏する活動に主体的に取り組んでいる（ワークシート）。
3	思いや意図をもつ		○「各声部の役割を生かした音色や音の重なり方で演奏にしたい。」という思いをもつ。 ・ワークシートを確認し、前回組み合せた音色の組合せの中で、各声部の役割が生かせていると考える組合せで演奏する。
	振り返る		○互いの演奏を聴き合い、各声部の役割を生かした演奏になっているかを振り返る。 ・グループの演奏を聴き合い、拍がそろっていなかったり、役割に合った音色ではなかったりしていることに気付く。
	技能の必要性を感じる		○拍をそろえて演奏することや役割に合った音色、音域、演奏方法に着目するために他のグループの演奏や範奏を聴く。 ・拍の合っていない演奏とそろっているグループの演奏を聴き比べて、拍をそろえて演奏することに着目する。 ・各声部の役割が異なる音色の演奏と声部の役割を生かす音色を選んだグループの演奏を聴き比べて、役割を生かした音色、音域、演奏方法で演奏することに着目する。

<table>
<tr><td></td><td>必要な技能に気付く</td><td>○必要な技能（①拍をそろえて演奏すること。②役割を生かした音色、音域、演奏方法で演奏すること。）に気付く。
・息をそろえて演奏を始めること、低音の声部に合わせて演奏することに気を付けて演奏することで、拍が合うことを確認する。
・音域を変えることや演奏方法を変えることで役割に合った演奏になることを確認する。
◆イ①各声部の楽器の音色や全体の響きを聴き、音の重なりを感じ取り、役割を意識した演奏の仕方について考えをもつ（発言の内容・行動観察）。</td></tr>
<tr><td rowspan="4">4</td><td>思いや意図をもつ</td><td>○「各声部の役割を生かした音色や音の重なり方で演奏したい」という思いをもつ。
・前回気付いた技能を意識しながら、自分の楽器を演奏する。</td></tr>
<tr><td>見通しをもつ</td><td>○各声部の役割を生かした表現になるように、音色を意識する。
・グループごとに、各声部の役割を生かした演奏にするために楽器の音色や音の重ね方をどのように変えたらよいか話し合う。
・ワークシートに、自分の演奏をどのように変えたら役割が生かせるのか、考えを記入する。

グループ
<table><tr><th>役割</th><th>楽器</th><th>演奏のとき気を付けたいこと</th></tr><tr><td>主なせんりつ</td><td>リコーダー</td><td>３段目に入るところを息を吸ってそろえる。</td></tr><tr><td>かざりのせんりつ</td><td>木琴</td><td>主役のリコーダーを生かすように、細かい連打で演奏する。</td></tr><tr><td>和音</td><td>鉄琴</td><td>和音のパートだから音がのびるようにペダルをふむ。</td></tr><tr><td>低音</td><td>オルガン</td><td>他のパートを支えるように、低い音で演奏する。</td></tr></table>児童のワークシートから</td></tr>
<tr><td>試す</td><td>○各声部の役割を生かした音色の働かせ方を試す。
・選んだ音色や奏法で演奏し、役割が生かせるように繰り返し試す。</td></tr>
<tr><td>振り返る</td><td>○演奏を録音し、各声部の役割を生かした演奏になっているかを振り返る。
・グループの演奏の録音を聴いて、各声部の役割を生かした演奏になっているかを考える。楽器の音色や音域、演奏方法をもう一度考えて、演奏する。
◆イ②音色や音域、演奏の仕方による音色の変化などを工夫している。
（演奏聴取・ワークシート）</td></tr>
<tr><td rowspan="6">5</td><td>思いや意図をもつ</td><td>○「各声部の役割を生かした音色や音の重なり方で演奏したい」という思いをもつ。
・前回気付いた技能に注意しながら、全員で自分の楽器を演奏し合わせる。</td></tr>
<tr><td>振り返る</td><td>○互いのグループの演奏を聴き合い、各声部の役割を生かした演奏になっているかを振り返る。
・グループの演奏を互いに聴く。</td></tr>
<tr><td>技能の必要性を感じる</td><td>○他のグループの演奏や範奏を聴いて、必要な技能(①拍をそろえて演奏すること。②役割を生かした音色、音域、演奏方法)で演奏することに着目する。
・グループの演奏を聴き、拍がそろっている演奏か、役割を生かした音色、音域、演奏方法で演奏しているか聴き取り、ワークシートに書く。</td></tr>
<tr><td>必要な技能に気付く</td><td>○必要な技能（①拍をそろえて演奏すること。②役割を生かした音色、音域、演奏方法で演奏すること。）に気付く。
・グループの演奏を振り返って意見を出し合い、拍をそろえて演奏することと役割に合った音色、音域、演奏方法で演奏することができていたか確認する。</td></tr>
<tr><td>技能の習得</td><td>○必要な技能（①拍をそろえて演奏すること。②役割を生かした音色、音域、演奏方法で演奏すること。）を身に付ける。
・拍をそろえて演奏すること、役割を生かした音色、音域、演奏方法で演奏することができるようになったことを確認する。</td></tr>
<tr><td>思いや意図をもった音楽表現</td><td>○「各声部の役割を生かした音色や音の重なり方」で演奏する。
・各グループの演奏でリレー奏を楽しむ。
◆ウ①担当している声部の役割を意識し、自分の演奏を全体の中で調和させて合奏をしている。（演奏聴取）</td></tr>
</table>

児童の変容

・一つの声部を取り出して聴いたり、重ねて聴いたりすることで、各声部の役割や音色、音の重なりに着目させることができた。
・各声部の役割を生かした演奏を比較して聴くことで、音色の選択や音の重ね方を具体的に理解することができた。
・各声部の役割を生かした演奏をしたいという思いをもつことで、楽器の音色、演奏方法や音の重ね方を意図的に考えることができるようになった。

【Ａ表現(3)音楽づくりイ　第１学年】

1　題材名　「といとこたえのあそびうたをつくろう」（３時間扱い）

2　題材の目標　言葉のもつリズムを手掛かりにして、思いをもって問いと答えの音楽をつくる。　〔共通事項〕　問いと答え、リズム

教材名　「かくれんぼ」（文部省唱歌／林　柳波作詞／下総　皖一作曲）

3　題材の評価規準

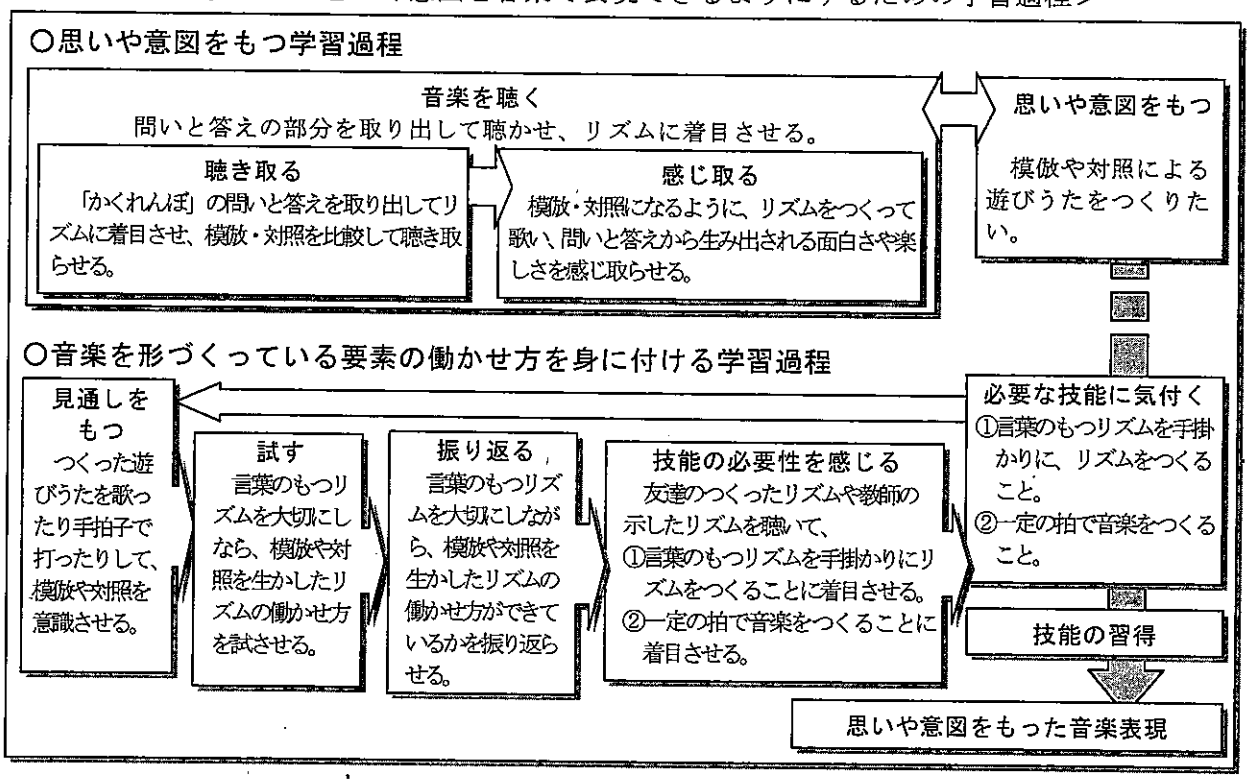
音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
問いと答えの音楽に興味・関心をもち、問いと答えの音楽をつくる学習にすすんで取り組もうとしている。	問いと答えを聴き取り、問いと答えの音楽が生み出す面白さや楽しさを感じ取りながら、問いと答えの音楽をつくる工夫をし、どのように音楽をつくるかについての思いをもっている。	問いと答えを生かすための基礎的な技能を身に付けて、音楽をつくっている。

4　題材観

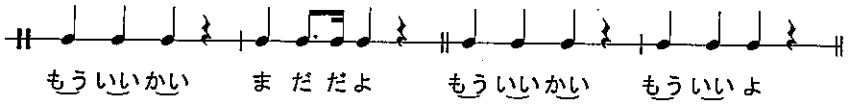
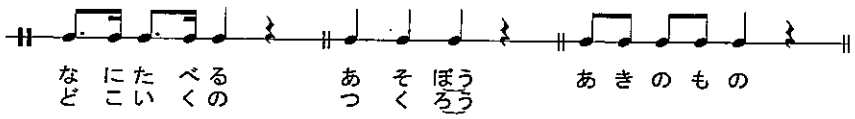
本題材は、学習指導要領第１学年の内容Ａ表現(3)音楽づくりイ「音を音楽にしていくことを楽しみながら、音楽の仕組みを生かし、思いをもって簡単な音楽をつくること」を実現するための題材である。問いと答えによる音楽の仕組みが生み出す面白さや楽しさを感じ取り、問いと答えを手掛かりとしてどのような音楽をつくるか明確な考えや願いをもてるようにする。問いと答えによる音楽の仕組みが生み出す面白さや楽しさは、問い掛けに対して答えるやり取りそのものや、問いと答えを繰り返すことで「模倣」や「対照」など、音楽が広がっていくことであると考える。互いに呼応する言葉をリズムにしてつなげることで、「模倣」「対照」などの問いと答えの音楽を楽しみながらつくることができるようにする。

＜本題材における音楽表現に必要な技能＞
①言葉のもつリズムを手掛かりにリズムをつくること。
②一定の拍で音楽をつくること。

＜表現したい思いや意図を音楽で表現できるようにするための学習過程＞



5　題材の指導計画と評価計画（３時間扱い）

時	学習過程		○学習内容　・学習活動　◆具体の評価規準（評価方法）
1	音楽を聴く	聴き取る	○「かくれんぼ」の問いと答えを取り出してリズムに着目させ、模倣・対照を比較して聴き取る。 ・問いと答えの部分のリズムを手拍子で打ち、「もう　いいかい」「まあだだよ」と「もう　いいかい」「もう　いいよ」のリズムの違いを比較し、問いと異なるリズムで答える前者は対照、問いと同じリズムで答える後者は模倣であることを聴き取る。  ・言葉をどのように手拍子にするかを確認する。
		感じ取る	○模倣・対照になるように、リズムをつくって歌い、問いと答えから生み出される面白さや楽しさを感じ取る。 ・「かくれんぼ」の「もう　いいかい」の問いに合った答えを考え、模倣や対照を意識しながらリズムをつくり、問いとつなげて歌う。 ・挨拶の言葉を模倣・対照になるようにリズムをつくって歌う。 ・問いと答えから感じ取られる面白さや楽しさについて意見を伝え合う。
	技能の必要性を感じる		○友達のつくったリズムや教師の示したリズムを聴いて、言葉のもつリズムを手掛かりにリズムをつくることに着目する。 ・言葉のもつリズムを手拍子で打つことで、言葉のもつリズムを生かすと、言葉による音楽をつくることができることに気付き、言葉のもつリズムを手掛かりにリズムをつくることに着目する。
	必要な技能に気付く		○必要な技能（①言葉のもつリズムを手掛かりにリズムをつくること。）を知る。 ・言葉のもつリズムを手掛かりにして、リズムをつくることを確認する。 ◆ア　模倣や対照に興味・関心をもち、問いに合った答えをつくる学習や言葉のもつリズムを手掛かりにリズムをつくる学習に進んで取り組もうとしている。（観察〈表情、行動〉）
2	思いや意図をもつ		○「言葉のもつリズムを手掛かりにしてリズムをつくり、模倣や対照による遊びうたをつくりたい。」という思いをもつ。 ・二人組になって提示された三つのリズム「なにたべる、どこいくの」「あそぼう、つくろう」「あきのもの」から歌の始まりとなる問いを選び、模倣や対照になるように、言葉のもつリズムを大切にしながらリズムをつくり、遊びうたをつくる。  ・つくった遊びうたを学習カードに記録する。
	見通しをもつ		○つくった遊びうたを歌ったり手拍子で打ったりして、模倣や対照を意識する。 ・つくった遊びうたを聴き合ったり、リズムを手拍子で打ったりして、模倣や対照を意識する。
	試す		○言葉のもつリズムを大切にしながら、模倣や対照になるようなリズムの働かせ方を試す。 ・二人組でつくった遊びうたをつなげて歌ったり言葉のもつリズムを手拍子で打ったりして、模倣や対照になるように遊びうたのつくり方を試す。
	振り返る		○言葉のもつリズムを大切にしながら、模倣や対照になるように遊びうたができているかを振り返る。 ・つくった遊びうたを歌ったり、手拍子でリズムを確認したりして、模倣や対照なるようにリズムがつくられているかを振り返る。

	技能の必要性を感じる	○友達のつくったリズムや教師の示したリズムを聴いて、一定の拍で音楽をつくることに着目する。 ・一定の拍でつくられた音楽とそうでない音楽を聴き比べて、一定の拍で音楽をつくることに着目する。 ・一定の拍の流れに乗って単語をリズムにしてリレーしたり問いと答えとつなげて歌ったりして、一定の拍で音楽をつくることに着目する。
	必要な技能に気付く	○必要な技能（②一定の拍で音楽をつくること）を知る。 ・教師の打つ拍や伴奏の拍の流れに乗って歌い、一定の拍で音楽をつくることを確認する。 ◆イ　模倣や対照を生かして音楽にしていくことをいろいろ試して、自分の考えや願いをもって遊びうたをつくる工夫をしている（音楽づくり）。
3	思いや意図をもつ	○「模倣や対照を生かして遊びうたをつくりたい。」という思いをもつ。 ・ワークシートを基に、自分たちのつくった遊びうたを思い出して歌ったり、友達のつくった遊びうたを聴いたりする。
	見通しをもつ	○模倣や対照を生かした遊びうたを歌ったり聴いたりして、模倣や対照を意識する。 ・友達のつくった遊びうたを聴いたり、教師の例示する模倣や対照を生かしたリズムを聴いたりして、模倣や対照を意識する。
	試す	○模倣や対照を生かしたリズムの働かせ方を試す。 ・模倣と対照を生かした遊びうたになるように、手拍子でつくったリズムを確認しながら歌ったり、言葉を替えてリズムをつくり替えて歌ったりする。
	振り返る	○模倣や対照を生かしたリズムの働かせ方ができているかを振り返る。 ・つくったリズムをつなげた遊びうたを歌ったり聴いたりして、気付いたことなどを伝え合う。
	技能の習得	○必要な技能（①一定の拍で音楽をつくること。②言葉のもつリズムを手掛かりにリズムをつくること。）を身に付ける。 ・必要な技能を意識しながら、つくった遊びうたを繰り返し歌ったり、言葉を替えてリズムをつくり替えて歌ったりする。
	思いや意図をもった音楽表現	○模倣や対照を生かして音楽をつくる。 ・自分たちのつくった遊びうたを歌って発表したり、友達の遊びうたを聴いたりする。 ◆ウ　模倣や対照を生かして音楽をつくっている（音楽づくり）。

児童の変容

・「問いと答え」のリズムを手拍子で打たせる手だてをとることにより、模倣や対照を意識したり、模倣や対照になるようなリズムの働かせ方を試行錯誤したりすることで、模倣や対照を生かしたリズムをつくることができるようになった。

・「言葉のもつリズムを手掛かりにリズムをつくること」と「一定の拍で音楽をつくること」の技能を身に付けることにより、問いと答えの生み出す楽しさや面白さを体感しながら問いと答えの遊びうたをつくることができた。

【Ａ表現(3)音楽づくりイ　第５学年】

1　題材名　「まとまりのある音楽をつくろう」（３時間扱い）

2　題材の目標　反復や変化を手掛かりとしてまとまりのある音楽をつくる。

〔共通事項〕　速度、反復、変化

教材名　「ハンガリー舞曲第５番」（ブラームス作曲）「リズムアンサンブル」

3　題材の評価規準

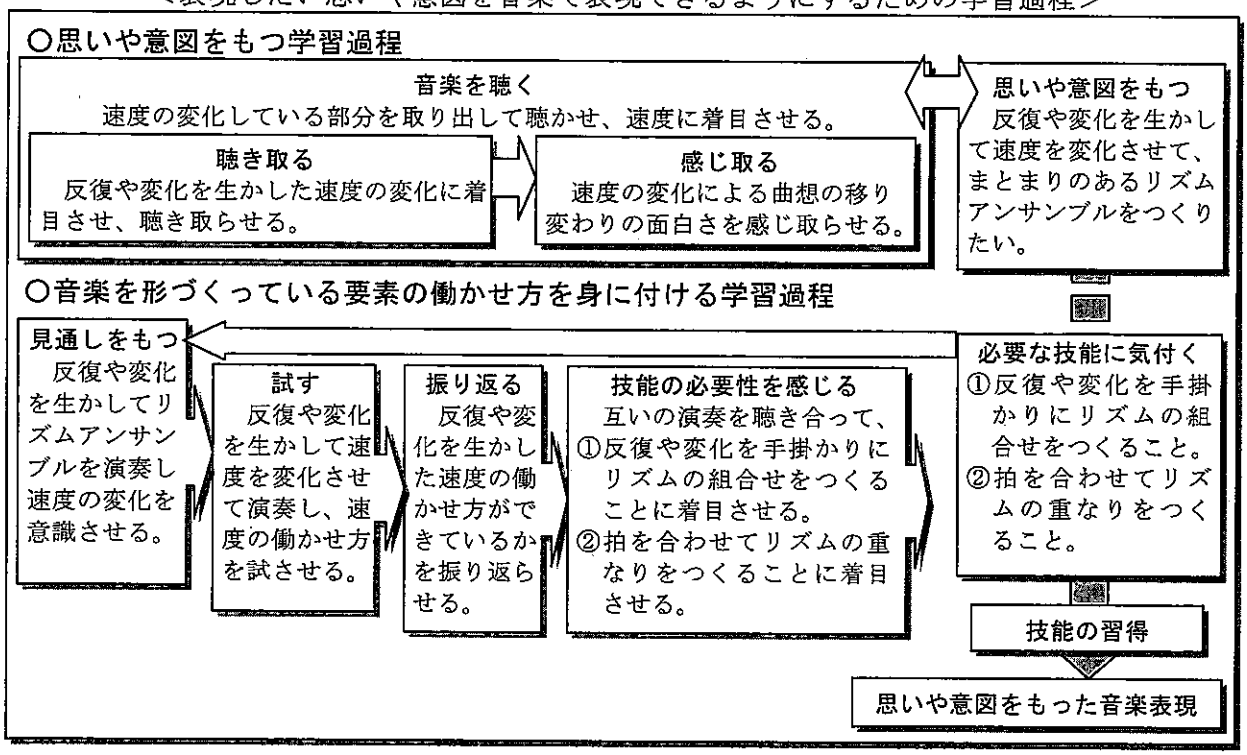
音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
反復や変化を生かし、音を音楽に構成することに関心をもち、見通しをもってまとまりのある音楽をつくる学習に主体的に取り組もうとしている。	反復や変化を生かした速度の変化を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さなどを感じ取りながら、構成を工夫し、どのように音楽をつくるか見通しをもっている。	反復を生かし速度を変化させるための基礎的な技能を身に付けて、音を音楽に構成している。

4　題材観

本題材では、学習指導要領の第５学年の内容Ａ表現(3)音楽づくりイ「音を音楽に構成する過程を大切にしながら、音楽の仕組みを生かし、見通しをもって音楽をつくること。」を実現するための題材である。速度の変化と、反復や変化と関わらせながらまとまりのある音楽を構成していけるようにする。「まとまりのある音楽をつくる」とは、反復や変化などの音楽の仕組みを手掛かりとして、決められたリズムの重ね方などを工夫しながら音楽に構成することと捉えた。音楽を聴いて、速度の働きによる曲想の変化の面白さを感じ取らせ児童が思いや意図をもてるようにする。

＜本題材における音楽表現に必要な技能＞
①反復や変化を手掛かりにリズムの組合せをつくること。
②拍を合わせてリズムの重なりをつくること。

＜表現したい思いや意図を音楽で表現できるようにするための学習過程＞

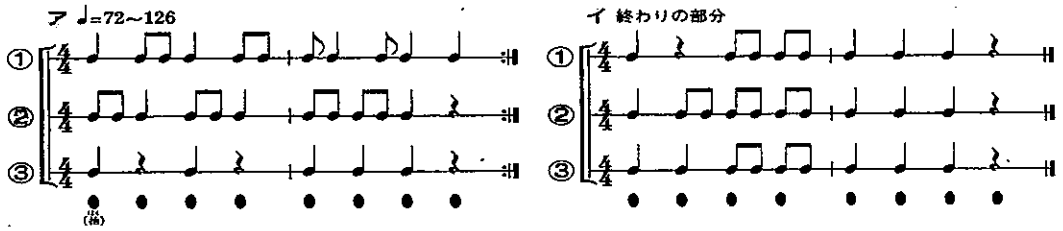


5　題材の指導計画と評価計画（抜粋）

時	学習過程		○学習内容　・学習活動　◆具体の評価規準（評価方法）
1	音楽を聴く	聴き取る	○反復や変化に着目し、反復や変化による曲全体の構成を聴き取る。 ・「ハンガリー舞曲第５番」の演奏を既習事項に当てはめ、楽譜を見ながら聴き、反復や変化による曲全体の構成に着目する。 ○「リズムアンサンブル」を聴き、反復や変化による曲全体の構成を聴き取る。 ・楽譜を見ながら演奏し、反復や変化に着目する。 ・曲全体を通して演奏し、反復や変化による曲のまとまりを聴き取る。
		感じ取る	○反復や変化がある曲全体の構成による面白さを感じ取る。 ・「リズムアンサンブル」を演奏し聴き合い、反復や変化がある曲全体の構成のもつ面白さを感じ取る。
		聴き取る	○反復や変化を生かした速度の変化に着目し、取り出された部分を比べ聴き取る。 ・「ハンガリー舞曲第５番」の[ウ]、[エ]の部分を取り出して聴き比べ、速度の変化に着目する。 ・異なる指揮者と演奏者による演奏を聴き比べ、速度の変化に着目する。 ・指揮者のようにして体を動かして聴き、速度の変化を聴き取る。
		感じ取る	○速度の変化が生み出す曲想の移り変わりの面白さを感じ取る。 ・「リズムアンサンブル」の終わりの部分の速度を変えた演奏を聴き、速度の変化による面白さがあることを感じ取る。
	思いや意図をもつ		○「反復や変化を生かして速度を変化させて、まとまりのあるリズムアンサンブルをつくりたい。」という思いをもつ。 ・全員でリズムの組合せを変えたり、重ねるリズムを変えたりしながら反復や変化を生かすことについて知る。 ・リズムの組合せやリズムの重ね方をどのように工夫したいかをワークシートに記入する。 ◆ア　反復や変化を生かし、音を音楽に構成することに関心をもち、見通しをもってまとまりのある音楽をつくる学習に主体的に取り組もうとしている。 （行動観察・発言内容・ワークシート）
2	思いや意図をもつ		○「反復や変化を生かして速度を変化させて、まとまりのあるリズムアンサンブルをつくりたい。」という思いをもつ。 ・ワークシートに記入した内容を確認して、全員でリズムの組合せを変えたり、重ねるリズムを変えたりしながら演奏する。
	見通しをもつ		○反復や変化を生かしてリズムアンサンブルを演奏し、速度の変化を意識する。 ・ワークシートを基に、反復を生かして速度を変化させるには、どのような構成にしたいかについてグループで話し合う。 ・アレンジシートにリズムの重ね方を記入する。
	試す		○反復や変化を生かした速度を考え、速度の働かせ方を試す。 ・グループでパートを決めてアレンジシートを見ながら演奏し、反復を生かした速度の働かせ方を試す。
	振り返る		○反復や変化を生かした速度の働かせ方ができているかを振り返る。 ・リズム譜を基に、反復を生かした速度の変化が思い通りにできたかについて話し合う。
	技能の必要性を感じる		○互いの演奏を聴き合って、必要な技能（①反復や変化を手掛かりにリズムの組合せをつくること。）に着目する。 ・互いに演奏を聴き合って、反復や変化を生かした音楽をつくることができているかについて話し合う。
	必要な技能に気付く		○必要な技能（①反復や変化を手掛かりにリズムの組合せをつくること。）に気付く。 ・まとまりのある音楽をつくるためには、反復や変化がより明確に分かるリズムの組合せにする必要があることを知る。 ◆イ　反復や変化を生かした速度の変化を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さなどを感じ取りながら、構成を工夫し、どのように音楽をつくるか見通しをもっている。（行動観察・発言内容・ワークシート）

3	思いや意図をもつ	○「反復や変化を生かして速度を変化させて、まとまりのあるリズムアンサンブルをつくりたい。」という思いをもつ。 ・板書やアレンジシートを基に、前回までの学習を確認する。
	見通しをもつ	○反復や変化を生かしてリズムアンサンブルを演奏し、速度の変化を意識する。 ・反復や変化を生かした速度の変化に着目し、「ハンガリー舞曲第５番」を聴く。 ・反復や変化を生かして速度を変化させるには、どのような構成にするのかグループで話し合う。 ・アレンジシートに変更部分のリズムの重ね方を記入する。
	試す	○反復や変化を生かした速度を考え、速度の働かせ方を試す。 ・反復や変化を生かした速度の働かせ方を試す。
	振り返る	○反復を生かした速度の働かせ方ができているかを振り返る。 ・リズム譜を基に、反復を生かした速度の変化が思い通りにできたかについて話し合う。
	技能の必要性を感じる	○互いの演奏を聴き合って、必要な技能（②拍を合わせてリズムの重なりをつくること。）に着目する。 ・互いに演奏を聴き合って、反復や変化を生かしたリズムの重なりになっているかについて話し合う。

アレンジシートから



担当	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	7回目	終わり
① さん								
② さん								
③ さん								

終わりを激しい感じに　させるために、　４回目からだんだん速く　する。

工夫したところ・最後を激しくさせるために７回目に誰も演奏しない部分をつくった。
・前半をゆっくりと１パートずつで演奏し、後半はパートを増やしだんだん速く演奏することで対比させて激しい感じを出すようにした。

児童のワークシートから

・７回目からだんだん速くするところが難しかったが、Ｔさんが指揮をしてくれてだんだん速くして激しい感じにすることができた。
・５班の発表で、誰も演奏しない小節があり、その後８回目の部分がぴったりと合っていて変化が感じられた。
・この学習を通して、速さの働かせ方が分かった。

児童の変容

・部分を取り出し、繰り返し聴かせたことで、反復の変化を生かした速度の変化に気付き、曲想の移り変わりの面白さを感じ取ることができた。
・拍を保つ、拍を合わせるという技能の必要性を感じ、互いに何度も聴き合い速度を変化させ演奏することを繰り返した。
・他グループの演奏と教師の価値付けにより、どうしたら拍が合うのか気付き、技能を習得し、速度を思いどおりに変化させ、曲想の移り変わりの面白さを表現できた。

4　「新学習指導要領に対応した授業の在り方」に関する調査結果

＜調査の概要＞

○対象　都内公立小学校 310 校の音楽専科教員　　○時期　平成 23 年 9 月

○方法　選択式によるアンケート用紙への回答

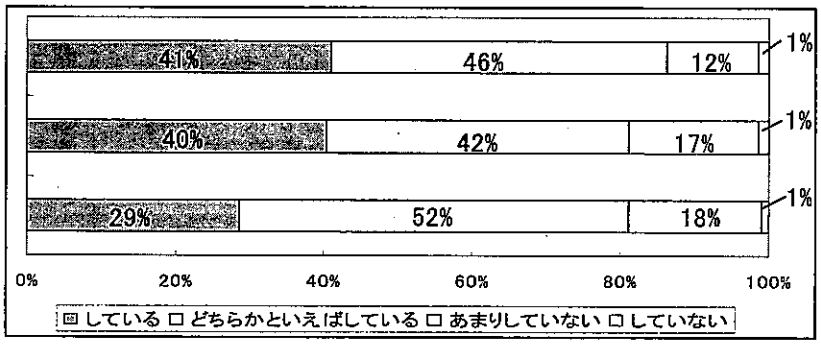
○趣旨　以下の指導内容における実態を把握し効果的な指導方法を明らかにする。

(1) 児童に音楽を形づくっている要素の働きを感じ取らせるための指導の工夫

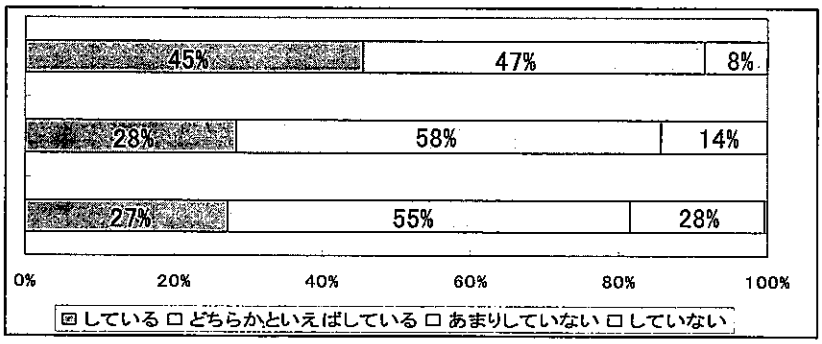
(2) 児童に思いや意図をもって表現させるための指導の工夫

(3) 児童の表現の仕方を工夫させるための指導の工夫

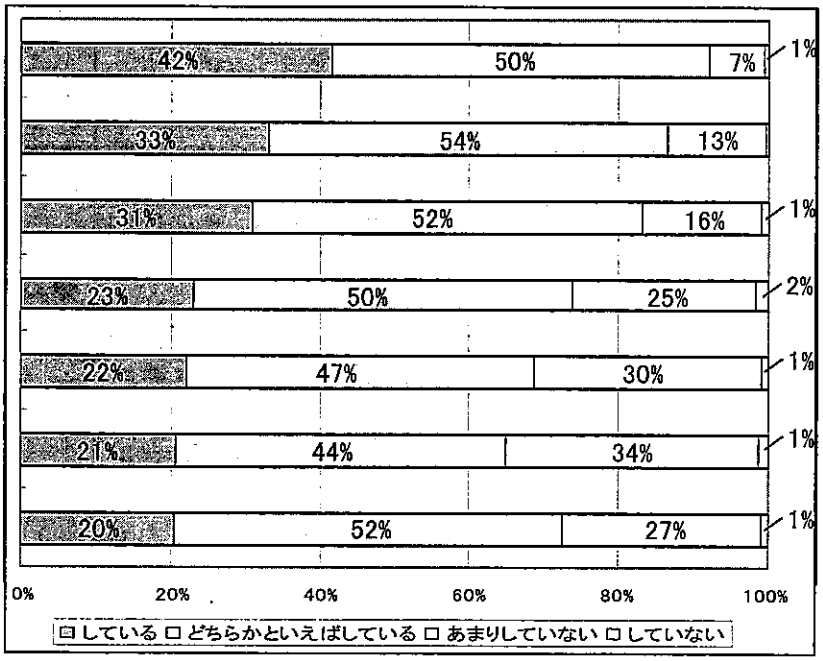
(1)　児童に音楽を形づくっている要素の働きを感じ取らせるために



(2)　児童に思いや意図をもって表現させるために



(3)　児童の表現の仕方を工夫させるために



5　音楽を形づくっている要素の働きとその働かせ方一覧表

音楽を形づくっている要素は、表現及び鑑賞における指導事項との関連を図り、指導のねらいに即して必要なものを、年間を通して継続的に取り扱うように工夫することが重要である。指導に当たっては、音楽を形づくっている要素を聴き取りやすい楽曲を教材として選ぶことが大切であるが、その際、指導しやすい要素に偏ることのないよう留意する必要がある。そのため、教師は、要素は要素の働きについて十分理解するとともに、児童が「要素を働かせる」とはどのようなことなのかを明確に捉えられるよう指導を工夫することが大切である。

そこで、音楽を形づくっている要素別に、要素を働かせることを示した一覧表を作成した。

	要素		要素の働き	要素を働かせる
音楽を特徴付けている要素	音色	多様な音色	声や楽器などから出すことができる様々な音の表情	●発音法や発声法、歌唱法を変化させる。 ●声や楽器の組合せを変化させる。 ●楽器の素材を変化させる。 ●楽器の演奏法を変化させる。
	リズム	音と音との時間的な関係	音の長短や強弱、有音と無音などの時間的な配分や組織化	●音の長短を変化させる。 ●有音と無音の時間的な関係を変化させる。 ●組合せ方を変化させる。 ●拍節的でないリズムを変化させる。
	速度	音と音との時間的な関係	音楽の時間的な進行における音と音との関係	●ふさわしい速度を設定する。 ●速度を保ったり変化させたりする。 ●緩急を対比させる。
	旋律	異なる音高や音価などの連なり	音の連なり方、旋律線のもつ方向性、装飾のされ方	●音の連なり方を変化させる。 ●旋律線の方向性を変化させる。 ●音の連なり方や言葉の抑揚を手掛かりに旋律の音高を変化させる。 ●装飾のされ方の違いを対比させる。
	強弱	音量の変化	相対的な音の大きさ、強さや弱さ、その変化	●音楽の全体や、部分における音量を変化させる。 ●音量を対比させる。 ●音の連なり方や言葉の抑揚を手掛かりに強弱を保ったり変化させたりする。 ●ある声部を重ねたり、除いたりすることで、音量を変化させる。
	拍の流れ	一定の時間的間隔や、間隔の伸び縮み	拍の流れの伸び縮みによって生まれる音楽の微妙な変化	●一定の時間的間隔を刻む。 ●拍の流れを伸び縮みさせる。

	フレーズ	音楽の流れの中で自然に区切られるまとまり	音楽のまとまり方	●歌詞の内容を手掛かりとして音楽のまとまりを変化させる。 ●曲の山を手掛かりとして音楽のまとまりを変化させる。 ●音の連なり方を手掛かりとして音楽のまとまりを変化させる。
	音の重なり	複数の高さの音が同時に鳴り響く縦の関係	音の重なり方	●重ねる声部の数を変化させる。 ●複数の高さの音を変化させる。
音楽を特徴付けている要素	音階	ある音楽で用いられる基本的な音をおよそ１オクターブ内で高さの順に並べたもの	音の並べ方	●音の並び方を変化させる。 ●音の構成を変化させる。
	調	主に長調と短調の２種類に代表される調性	調性の違い	●長調から短調、短調から長調に転調させる。 ●移調させる。
	和声の響き	調のある音楽での音の重なりとその響き	音や旋律の重なり方	●音の連なり方の組合せを変化させる。 ●和音と和音の連なり方を変化させる。
音楽の仕組み	反復	リズムや旋律などの連続した繰り返し 音楽のいくつかの場所で合間をおいた繰り返しA-B-Aの三部形式に見られる再現による反復	繰り返し	●音を音楽へと構成する原理の働きを生かす。 ●全体的なまとまりとしての繰り返しを生かす。
	問いと答え	ある音やフレーズ、旋律に対して、一方の音やフレーズ、旋律が互いに呼応する関係	呼応	●音を音楽へと構成する原理の働きを生かす。 ●全体的なまとまりとしての呼応を生かす。
	変化	音楽を特徴付けている要素及び音楽の仕組みの関わり合いの変化	関わり合いの変化	●音を音楽へと構成する原理の働きを生かす。 ●全体的なまとまりとしての関わり合いの変化を生かす。
	音楽の縦と横の関係	音の重なり方と時間的な流れとの関係	音の重なり方と時間的な流れとの関わり合い	●音や旋律の組合せ方を試す。 ●複数の高さの音の連なりと、音と音との時間的な流れとの関わり合い方を試す。

Ⅵ　研究の成果と課題

1　研究の成果

「思いや意図をもつ学習過程」と「音楽を形づくっている要素の働かせ方を身に付ける学習過程」の二つの学習過程での指導方法を工夫することで、児童が自分の思いや意図をもち、思いや意図を的確に表現するために必要な音楽表現の技能を習得し、思いや意図を音楽で表現できるようになることが分かった。

(1)　「思いや意図をもつ学習過程」における指導

旋律と強弱の関わり合いを聴き取らせるために、指揮者が違う演奏を聴き比べさせたり、既習内容と照らし合わせながら聴かせたりするなど、思いや意図の手掛かりとなる要素に着目させるために、意図的に音楽を取り出して音楽を聴かせることが有効であった。その際、ねらいを達成するための適切な楽曲選択や、使用する楽曲の部分について十分な教材研究が重要であった。また、着目した要素を「聴き取る」段階、その要素の働きによるよさや面白さを「感じ取る」段階に分け、手だてを明らかにし、要素の働きによるよさを感じ取らせることにより、感じ取ったことを手掛かりにした「思いや意図をもつ」ことができることが分かった。

(2)　「音楽を形づくっている要素の働かせ方を身に付ける学習過程」における指導

「見通しをもつ」「試す」「振り返る」「技能の必要性を感じる」「必要な技能に気付く」段階を経ることにより、「技能の習得」が、「思いや意図をもった音楽表現」につながることが分かった。見通しをもたせて児童が考えた内容を基に、複数の方法を試しながら歌ったり、楽器や音色の様々な組合せを試しながら演奏したりする活動や、その表現が思いや意図を表現しているかを振り返る活動を意図的に設定し十分な時間を保障することが大切であった。そして振り返った内容を基に、児童が技能の必要性を感じることで、技能は思いや意図を実現するための手段となった。

この二つの学習過程を経ることにより、児童は自分が音楽から感じ取ったものは要素の働きによるものだということに気付いた。そして、「この要素をこんなふうに働かせれば思いどおりの表現ができるだろう」という見通しをもつことができたことが、技能が思いや意図を実現するための手段となった。二つの学習過程での指導方法を工夫することで、児童自らが必要な音楽表現の技能に気付き、習得し、表現したい思いや意図を実際に音楽で表現することができた。

(3)　「音楽を形づくっている要素の働きとその働かせ方一覧表」作成

要素の働きに着目させるという視点から教材選択を工夫する必要があるため、「音楽を形づくっている要素の働きとその働かせ方一覧表」を作成した。共通事項で扱う要素を網羅し要素の働かせ方を明確にしたこと、また要素の関係性や関わり合いを明確にしたことで、児童に分かりやすく関連付けて指導することができるようになった。

2　今後の課題

鑑賞の分野も含め全学年において、音楽を形づくっている要素の働きに着目させるという視点での研究を更に深め、検証を通して具体的な手だてを増やしていくとともに、「音楽を形づくっている要素の働きとその働かせ方一覧表」に反映させ、一覧表の精度を上げていく。

平成２３年度　教育研究員名簿

小　学　校　・　音　楽

地区	学　校　名	職名	氏名
墨　田　区	押　上　小　学　校	主任教諭	山形　扶美子
豊　島　区	高　南　小　学　校	主任教諭	武井　紗弥香
板　橋　区	上板橋第二小学校	主任教諭	橋本　静代
調　布　市	第　二　小　学　校	主任教諭	○黒岡　祐恵
あきる野市	南秋留小学校	主任教諭	古川　いずみ

○　世話人

〔担当〕東京都教職員研修センター研修部教育経営課
指導主事　玉野　麻衣
東京都教職員研修センター研修部教育開発課
指導主事　山根　まどか

平成23年度
教育研究員研究報告書

小学校　音楽

東京都教育委員会印刷物登録
平成２３年度第１８１号
平成２４年　３月

編集・発行　東京都教育庁指導部指導企画課
所 在 地　東京都新宿区西新宿二丁目８番１号
電話番号　（０３）５３２０－６８３６
印 刷 会 社　有限会社　シーダー企画